第三章

松尾山へ入る

九月に入り、小早川勢は近江の高宮まで出て、そこに陣を置いた。西軍の作戦にも加わらず、家康の軍へ合流するでもなく、高宮にとどまっている。家康が江戸を発ち、東海道を西へ上っていることは西軍の陣でも知られており、大谷吉継が山中に構えているのは、美濃から近江へ抜ける道を押さえるためであった。

秀秋が待っているのは、家康が尾張の清洲を発ったという報せだった。家康が美濃まで出たと聞いてから発ったのでは、家康が大垣の前に出るころ、こちらはまだ高宮から松尾山までの道中にいる。かといって、家康が遠いうちに勝手に山へ入れば、西軍のただ中で小早川の8,000の兵だけが疑われて孤立する。

秀秋のそばには、家老の稲葉正成と平岡頼勝が控えていた。

「何もしないのですか」と稲葉が言った。

「している。待っている」

「物見の話では、山にはまだ大軍が入っていません。いま取っておけば、誰にも先を越されません」と稲葉は続けた。

「取ってから家康が来なかったら、どうなる」

稲葉が口をつぐんだ。

「山を取ったあとで、取らなかったことにはできない」

「……ですが、日を置けば、ほかの軍勢が入るかもしれません」と稲葉は食い下がった。

「入られたら、そのときに別の手を考える。味方が近くにいないうちに疑われる行動を起こして、四方を敵に囲まれる。それを勇気と呼ぶなら、私は臆病でよい」

平岡は小さく笑ったが、稲葉は笑わなかった。

分析I-6 松尾山を取られた三成は、どう応じるか（第四章）

要点

秀秋が松尾山を取ったことで、三成のどの対応にも代償が伴うようになった。

九月十四日、大垣城の三成の背後の高地に、小早川勢8,000が入った。大垣に残って見張るだけなら、背後に大軍を残したまま家康と戦うことになる。小早川を攻めれば、まだ離反を表明していない味方の大名を、奉行の一存で攻めることになる。総大将の輝元は大坂にいて、三成は単独では決断できない（本作の仮定）。毛利勢に牽制させようにも、毛利の一門である小早川に兵を向けさせる根拠がない。主力を関ヶ原の方面へ移し、大谷の方面と合わせて小早川を牽制すれば、主力を保ち、近江への退路を守り、家康との決戦にも備えられる。しかも、その場で小早川を敵と断定する必要がない。本作では、三成はこの対応を選び、大谷に、山中の陣を松尾山の正面まで寄せるよう指示したと推定する。秀秋が作り出したのは、三成のどの対応にも代償が伴う状況であり、秀秋は三成がどの対応を選ぶかまでは予測していない。

ゲーム理論では

相手が合理的に応じても、こちらに不利な対応を相手がとりにくい状況を、先に作ることはできる。三成の対応は、本作の仮定の下では、制約の中での合理的な対応である。この夜から決戦の朝までは、どのプレイヤーも相手の行動をすべては観察できない（不完全情報）。松尾山への入城、大垣からの出陣、盆地への進入のような、観察可能で撤回コストの高い行動が起きるたびに、ほかのプレイヤーは相手の意図についての予想を改める。

意思決定の構造

プレイヤー	三成（相手は松尾山の秀秋）
ゲーム構造	逐次ゲーム
主要概念	制約の下での合理的な対応、戦略環境の変更
保有情報	小早川の松尾山入り、大垣への招きに応じないこと、家康との内通の情報、家康自身の赤坂着（最後の一つを三成がこの夜に知っていたとするのは本作の仮定）
不確実性	秀秋が家康と内通しているか（不完全情報）。秀秋がどの条件で家康方を選ぶのか（不完備情報）
目的	西軍の主力を保ち、近江への退路を守り、家康との決戦に備える

選択肢の比較

1　主力は大垣に残り、小早川は見張るだけにする

利点

- 兵を動かさず、大垣城の防御力を利用できる

代償・リスク

- 側背の高地に小早川勢8,000の兵を残したまま家康と戦う。
- 家康が大垣を越えて西へ出れば、止められない。
- 大谷を山中で孤立させ、近江への退路も危うくする。

2　主力は大垣に残り、毛利勢を先に関ヶ原へ出して小早川を牽制させる

利点

- 主力を動かさずに、関ヶ原方面の防衛を強化できる

代償・リスク

- 毛利勢にその一門である小早川勢の牽制を正当化できる根拠がない。
- 率いるのは秀元で輝元本人ではなく、吉川広家ら毛利家中の合意がなければ動かしにくい。

資料C

史料・通説・創作の境界

本作は創作だが、どこまでが史料に基づき、どこからが解釈で、どこからが完全な創作なのかは、読者が区別できるようにする必要がある。資料Cはそのための一覧で、あわせて本作が依拠した主な参考文献を挙げる。

資料C-1　史料の扱い方

関ヶ原については、史料上の確度の異なる記述が同じ調子で語られてきた。合戦の二日後に書かれた書状も、百年後に編まれた軍記も、現代の解説板も、並べて読めば同じ「史実」に見える。そこで資料Cは、本作が用いた材料を、次の種類に分けた。

1. 同時代史料。合戦の当時に書かれた書状・日記など。写しで伝わるものは、写しであることを明記する
2. 後世の家譜と覚書。江戸期に大名家や幕府が編んだ家譜・系譜類と、当事者やその家臣が後年に書き残した覚書・記録
3. 軍記。江戸期に成立した軍記物
4. 近現代の研究。明治以降の戦史と、近年の研究者の論考・著作
5. 通説。広く採られているが、同時代の史料では確かめられない整理。明治以降の参謀本部の布陣図などをもとに広まった配置がこれにあたる
6. 本作独自の推論。史料にそのまま書かれてはいないが、確認できる状況から本作が導いた解釈
7. 分析のために置く仮定。史料ではいくつかの選択肢のどれとも決められない論点について、本作が物語と分析のために一つを採った前提。証拠から導いたものではない
8. 完全な創作。史料で確かめられないため本文で補った、人物の思考と台詞、人物同士の応対、場面の細部

後世の家譜や軍記に見える記事を「後世の家譜と覚書」「軍記」の種類に分けたのは、「まちがい」という意味ではない。広く知られているが、同時代の史料では確かめられない、という意味である。

資料Cは論点ごとに分けて、伏見城（資料C-2）、東軍との事前交渉（資料C-3）、松尾山（資料C-4）、大垣から関ヶ原への移動（資料C-5）、大谷と四家（資料C-6）、南宮山と吉川（資料C-7）を表にまとめた。本作独自の推論と分析のために置く仮定は資料C-8に、本文上の完全な創作は資料C-9にまとめた。説が分かれている論点では、採った説と採らなかった説の両方を挙げた。

上に挙げた八つの種類は、主として成立の時期・伝来・種類による分類である。個々の記述の史料上の確度は、これとは別の要因で決まる。誰が誰に何のために書いたか、直接見たのか伝え聞いたのか、原本か写しかは、各項で記す。

一件ごとに、どの史料の何条・何号まで拠ったかは、著者サイトの「史料の細目」に挙げた。